

山形大学附属博物館

YAMAGATA UNIVERSITY MUSEUM 2017.3

館報 43

目 次

特別展「沖縄と山形をつないだ琉球漢詩文」の開催に向けて	新 宮 学 (1)
平成 28 年度実施の特別展・企画展	(6)
資料紹介 — 結城哲雄《蒔絵清庭文庫》—	須 藤 静 香 (11)
平成 28 年度事業報告	(12)

特別展「沖縄と山形をつないだ琉球漢詩文」の開催に向けて

新 宮 学 (附属博物館長)

小白川図書館との共同開催

附属博物館では、今年 10 月に本学小白川図書館と共同で特別展「沖縄と山形をつないだ琉球漢詩文」を開催する予定である。山形県の郷土史家の先駆けである伊佐早 謙 (1857 ~ 1930) の蔵書「林泉文庫」に収集された琉球・沖縄の漢詩文と関係する資料を展示し、近代以降、最後の米沢藩主上杉茂憲と伊佐早がつないだ沖縄と山形との深い結びつきを広く紹介することを企図している。展示会場は、一昨年 11 月にリニューアルオープンした当館の特別展スペースと、この 4 月に小白川図書館の耐震改修工事が完了して設置されるグループワークエリアを予定している。

郷土史家・漢詩人としての伊佐早謙

伊佐早謙は、近代山形の郷土史家の先駆けである。このことは、1920(大正 9)年に刊行された最初の『山形県史』の編纂主任を担ったことから明らかである。ほかにも、『奥羽編年史料』(1905)、『編年西村山郡史』(1915)、『東村山郡史』(1919)など、東北や山形に関する数多くの歴史書を編纂している。

幕末の 1857(安政 4)年に米沢藩士の家に生まれた伊佐早は、1890(明治 23)年から晩年にいたるまで上杉家記録編纂所の総裁を委嘱され、『上杉家御年譜(茂憲公)』『鷹山公遺事』『編年子爵上杉家記』などの執筆にあたったことでも知られている(図版 1)。

藩校興譲館の提学(校長)片山一貫(弦斎)の門に入り漢学を修めた伊佐早は、漢詩文にも造詣があり、若くして天文年間から明治維新にいたる間の藩主や藩士の絶句を蒐集した『鶴城詩集』(1879)を編纂出版した。鶴城とは米沢城の雅称「舞鶴城」のことである。晩年には、「樅軒」や「宕山」の号を用い、自らの漢詩を収めた『恩榮紀詩』(1925)や『樅軒稿』(1926)を出版している。

能書家としても知られ、米沢城址に立つ「甘棠之碑」碑陰の「松ヶ崎公園記」や「行在所遺趾」などを始めとして、伊佐早が撰文揮毫した石碑がいまも米沢には多く残されている。



図版 1 伊佐早謙肖像
(『米沢市史編集資料』12号)

教育者・図書館人としての伊佐早謙

米沢中学校（現、米沢興譲館高校）教諭を長年にわたって務め、郷里の後進たちを数多く育てた優れた教育者であった伊佐早は、1881（明治 14）年から 3 年ほど山形県師範学校（現、山形大学地域教育文化学部）の三等助教諭として在職していた。

さらに米沢の各界に働きかけて、1908（明治 41）年「財団法人米沢図書館」（市立米沢図書館の前身）の設立に尽力し、翌年 10 月に開館した。これにより藩校興譲館の図書が、散逸することなく現在にいたるまで引き継がれたのは稀有のことである。いわゆる「米沢善本」として知られる貴重書の守り人であったとも言えよう。1912（大正元）年 11 月から亡くなる直前の 1930（昭和 5）年 4 月までは、第二代館長として引き続き貴重書の蒐集に努めるなど、図書館人としての貢献も特筆に価するものがある。

伊佐早謙の蔵書「林泉文庫」

林泉文庫は、伊佐早個人が収集した米沢藩関係の書籍と古文書、および古典籍からなる一大コレクションである。文庫名の「林泉」とは、彼の書屋があった米沢の林泉寺町に由来している。

郷土史家として多くの史書を編纂し、上杉家の史料編纂も委嘱された伊佐早が蒐集した蔵書は、その没後、遺言によりいったん上杉家に寄贈された。1938 年以降は米沢図書館に寄託されていたが、戦後の 1953（昭和 28）年に上杉家からの打診を受けて市立米沢図書館が購入した（1322 タイトル）。その後に白鷹の瑞龍院龍門図書館（約 500 タイトル）、米沢女子短期大学附属図書館（94 タイトル）も購入。その残りを本学附属図書館の旧教育学部分館が購入した。その結果、林泉文庫は数所に分散して収蔵されたため、膨大な文庫の全体像が見えにくくなったきらいがある。

本学図書館では、主に和・漢の古典籍を中心に収蔵している（約 1,170 タイトル）。教育学部が 1955 年 3 月から数度にわたって購入し、教育学部分館が登録を済ませたのは同年 11 月のことである。同館の図書原簿の備考欄に、「昭和 29 年度父兄会入学寄附（金）」と注記しているものがあることから、その一部は入学寄附金による購入であった。前述したように師範学校在職の縁もある伊佐早の貴重な蔵書を教育学部が購入した経緯の詳細は、いまとなっては明らかではない。おそらく仲介の労をとったのは、同学部所属で本館初代館長の長井政太郎教授（1952～70 年在任）であったと推察される。

本学収蔵の和書については、国文学研究資料館の依頼で旧教養部の山本陽史教授と旧教育学部の国文学関係教員らが 1999（平成 11）年から始めた未整理和装本調査がある。調査にはすでに終了し、同資料館の HP で書誌データの検索が可能になっている。その中には、旧林泉文庫所蔵の和書も一部含まれている。漢籍については、2005（平成 17）年から旧人文学部の中国学関係教員が学部の研究支援を受けて 2 年間実施した未整理漢籍の調査があるが、その後は中断している。さらに 2006～8 年にかけて附属図書館目録情報係が行った遡及入力作業などにより、現在では旧林泉文庫も含めて利用可能となっている。

うるま市立中央図書館による調査

さて、本学所蔵の旧林泉文庫に貴重な琉球関係資料がまとまって存在することを最初に注目したのは、うるま市中央図書館の榮野川敦館長や鹿児島大学の高津孝教授たちであった。同市教育委員会が「蔡大鼎『伊計村遊草』等調査研究事業」を進める中で、2013（平成 25）年 6 月と 7 月の 2 度にわたって小白川図書館に来館し、約 28 点にのぼる琉球・沖縄関係資料の存在を明らかにした。

その調査成果は、沖縄県うるま市教育委員会編『蔡大鼎「伊計村遊草」等調査研究事業研究成果報告書』（2015）に詳しくまとめられている。市民向けには、『うるま 漢詩ロード散策』1～5 号が発行されている。2014 年 3 月に開催された史料展示会「蔡大鼎がつないだ縁『伊計村遊草』との出逢い―大陸と琉球と山形・米沢と―」では、旧林泉文庫所蔵資料 22 点（山大 20 点、米短 2 点）が展示された。地

元の新聞にも、琉球関係資料の「90年ぶりの里帰り」として大きく取り上げられた。

伊佐早の沖縄調査

それでは、郷土史家の伊佐早が収集した林泉文庫の中に、何故琉球・沖縄関係資料がまとまって残されているのであろうか。そこには、最後の米沢藩主となった上杉茂憲の存在と、伊佐早自身の漢詩文の嗜みが大きく関わっている。前述したように上杉家の記録編纂を委嘱された伊佐早は、第13代茂憲公に関する資料収集を進める中で資料不足に苦しんでいたようだ。

廃藩置県により伯爵となった茂憲は東京に移り住んだ。英国遊学を終えると、「琉球処分」により新たに設置されてから日が浅い沖縄県の第二代県令として赴任した（明治14年6月～16年4月）。県令としての足跡は、近年高橋義夫『沖縄の殿様——最後の米沢藩主・上杉茂憲の県令奮闘記』（中公新書・2015）が出版されて、沖縄県にとどまらず広く知られるようになった。茂憲は、とくに教育面に力を注ぎ師範学校を充実させ、最初の県費留学生を東京に派遣した。ときの明治政府の思惑に反し、急進的な改革を進めようとしたために2年たらずで職を解かれ、元老院議員に任命された。沖縄を去るにあたり、当時としては破格の1,500円の奨学資金を寄付している（県令の月俸は200円）。このため沖縄では、現在でも旧慣の改革を試みた開明的県令として評価されている。

伊佐早の沖縄調査の旅は、茂憲公の事蹟と関係資料の収集が目的だった。当時の「米沢新聞」によれば、その出発は1924（大正13）年2月10日、仙台経由で帰米したのは3月22日であるから併せて40日余りである。随行した孫の河野彦一の便りによれば、神戸港から汽船で出港し、鹿児島に立ち寄ったのち、奄美大島の名瀬港を経由して那覇港にようやく到着している。おそらく実際の沖縄滞在日数は20日ほどと推定される。

戦禍を免れた琉球・沖縄関係資料

林泉文庫に収められた琉球・沖縄関係資料には、漢詩人で「琉球処分」後に救国運動に奔走した蔡大鼎^{りん せい こう}や林世功^{りん せい こう}（1841～1880）に関係する書籍が数多く含まれている。久米村の士族で、清国への朝貢業務に関わっていた家柄の蔡大鼎、それに父徳懋^{とく ぼう}や弟大受^{たい じゅ}、叔父徳昌^{とく しょう}などが所持していた鈔本（写本）である。たとえば、福建の欽思堂で出版された大鼎撰『北燕游草』や、『呈文集』（大鼎旧蔵）、『官生鄭孝徳詩文集』（徳懋旧蔵）、『意山堂詩集』（大受旧蔵）、『琉球正使毛國棟詩』（徳昌旧蔵）などはおそらく蔡氏の関係者から一括して入手したものと考えられる（図版2）。

琉球の分島・改約案に抗議して自決した林世功の関係では、『林世功遺稿』や『呈文』（世功旧蔵）、『詩稿』『詩文稿』などがある。とくに救国運動の貴重な資料である本学所蔵『林世功遺稿』は、現在沖縄ではその現存が確認されていない。榮野川・勝連両氏がすでに明らかにしているように、戦前の県立沖縄図書館の目録である『琉球史料目録』（1924）等に著録されていることから、沖縄図書館所蔵本を筆写したという推定は誤りない。伊佐早の来沖は、大正13年2月29日付『沖縄タイムス』では、「沖縄縣令たりし上杉茂憲伯の事跡調査の爲／米澤図書館長伊佐早謙氏来た口」と報じていることから、伊佐早は米沢図書館長の肩書きを用いて図書館ルートで筆写させたのであろう。



図版2 『北燕游草』内表紙と封面
（山形大学小白川図書館所蔵）

ご存知のように沖縄は、太平洋戦争下におけるアメリカ軍による空襲と地上戦で甚大な戦禍を被った。県立沖縄図書館の蔵書約3万冊を始めとして、数多くの書物や古文書類が灰燼に帰した。このため、伊佐早が大正期に収集した琉球・沖縄関係書籍は、その戦禍から偶然にも免れた資料としてとても貴重なものとなったのである。山形に住む私たちには、これらの資料を後世に大切に伝えていく責務がある。

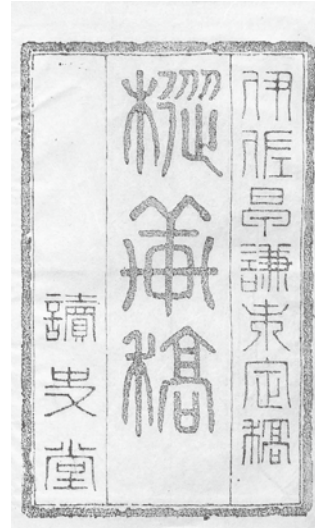
伊佐早が沖縄で詠んだ漢詩

伊佐早の沖縄での足取りは、いまのところ詳しくは判っていない。彼の文集『樅軒稿』に収められた漢詩から、豊見城址・首里城・運天湾（港）・波上宮と筍崖・明倫堂・風月楼（御物城）などを訪れたことが判明する（図版3）。

その中から、首里城に訪れた時の七言律詩一首を訓読して紹介する。

首里城に登る

首里の城頭 夕陽ならんと欲す
往事を追思するに転た心傷む
苑花空しく見ゆ 当年の色
宸殿猶お存す昔日の香り
緑樹森々として廢園を鎖す
蒼苔密々として残牆を護る
祇に今は只だ龍潭の碧有るのみ
曾て宮人多少の粧いを照らすや



図版3 『樅軒稿』封面
(山形大学小白川図書館所蔵)

伊佐早は、瑞泉門に向かって右手にある龍樋に立ち寄り、首里城に登ったのであろう。石組の城壁の向こうに茫洋と広がる東シナ海に沈む夕陽を眺めている。往事を追思して心を痛めたという彼の脳裏にふと去来したのは、「琉球処分」で滅んだ尚氏琉球王朝と廃藩された米沢藩上杉氏との不思議な縁であったのかもしれない（図版4）。

伊佐早が沖縄で逗留していたのは、那覇の著名な旅館「花月」であった。沖縄を去るにあたって題した七言絶句からは、当時の伊佐早の風貌と行動の一端を窺うことができる。



図版4 世界文化遺産の首里城瑞泉門

将に琉球を癸せんとし 花月の寓樓の壁に題す
双眼電の如く兩鬢は銀いろなり
遊ぶに倦む 六十八齡の身
醉顛し筆を提げて狂語を題す
五百年來 此の人意からんと

この詩には、伊佐早自身が「余は木屐履きで竹杖をついて琉球入りした。土地の人たちが思うにはこれまでこんな人は無かった」と注付記している。茂憲県令の足跡を探し求めて精力的に沖縄を回ったというよりは、この花月や料亭の風月楼で茂憲ゆかりの人々と会っては、聞き取りや詩作を重ねていたのであろう。

特別展のための沖縄調査

10 月からの特別展開催に向けて、本館では 2 月下旬に科研費補助金による琉球大学附属博物館（風樹館）の訪問調査の機会を利用して、うるま市中央図書館市史編さん係を訪れた。これまでの調査事業の成果概要について説明を受けるとともに、3 年前の展示会でのさまざまな工夫等をお聞きすることができた。

同館では、本学所蔵資料の展示借用とともにその撮影と複製本の製作を申請していた。その後複製本を製作した際に、本学への寄贈分も同時に用意された。今回の訪問では、複製本製作を許可した小白川図書館に代わって、『北燕游草』、『呈文集』、『琉球正使毛國棟詩』、『林世功遺稿』、『官生鄭孝徳詩文集』、『意山堂詩集』の併せて 6 点の複製本を預かってきた。特別展では、本学所蔵原本の展示のほかに、うるま市中央図書館から寄贈された複製本の展示も行い、自由に繙くことができるようにしたいと計画している。

来る特別展（10 月 7 日～ 11 月 14 日開催）では、近代山形最初の郷土史家・図書館人としての伊佐早謙の事績とともに、本学旧林泉文庫所蔵の琉球漢詩文を介して生まれた山形と沖縄との深い結びつき（沖縄方言：ゆいまーる）に、多くの方々が思いを馳せていただけることを期待している。

〈参考文献〉

山形県立図書館編「故伊佐早謙先生閔歴」山形県図書館協会『行啓記念 山形県立図書館一覧』附録（1930）

今泉亨吉「伊佐早謙」『米沢市史編集資料』12 号「続米澤人國記〈近・現代篇〉」（1983）

東海林静男『「上杉家御譲本」の所在調査とその史的研究』科研研究成果報告書（1989）

清野悦良「貞珉に令名を留めた碩学の書家 湯野川忠國と伊佐早謙」『置賜文化』97 号（1995）

新宮学「本館所蔵の 160 年前の中国カレンダー」山形大学附属図書館報『やまびこ』57 号（2006）

市立米沢図書館編『米沢図書館 100 年』（2009）

青木昭博「市立米沢図書館の蔵書と現在の興譲館本」岩本篤志編『米沢興譲館書目集成』第四巻、ゆまに書房（2009）

同「伊佐早謙の沖縄調査と琉球漢詩」上杉鷹山公と郷土の先人を顕彰する会『先人顕彰』21 号（2013）

新城俊昭『琉球・沖縄史』沖縄歴史教育研究会（2014）

榮野川敦・勝連晶子「戦前に流出した琉球・沖縄関係資料について」沖縄県うるま市教育委員会『蔡大鼎「伊計村遊草」等調査研究事業研究成果報告書』（2015）

平成 28 年度 特別展・企画展

特集展示「広開土王碑拓本」

主 催：山形大学附属博物館
会 期：2016 年 5 月 20 日（金）～ 6 月 20 日（月）
[23 日間]
会 場：山形大学附属博物館
来場者数：1,830 人
関連行事：ミニ講演会「広開土王碑拓本の研究最前線」
日 時：2016 年 5 月 20 日（金）16:30 ～
参 加 者：25 人



展示風景



第 65 回東北中国学会（5 月 28 日（土））に合わせ、本学小白川図書館所蔵の「広開土王碑拓本」を展示した。

広開土王碑は、4 世紀末から 5 世紀初頭にかけて活躍した高句麗の王を顕彰する目的で建てられた石碑である。この拓本は平成 23 年に小白川図書館より発見された 4 世紀の日本列島の歴史を知る上で貴重な資料であり、また戦前の歴史研究、歴史教育を考える上で重要な資料である。5 月 28 日（土）は土曜開館とし学会参加者および地域の利用者の弁を図った。

ミニ講演会「広開土王碑拓本の研究最前線」では、本学図書館所蔵の同拓本を「発掘」した三上喜孝氏（現国立歴史民俗博物館准教授）が講師をつとめ、山形大学本の「発掘」の経緯と調査成果、その後に急速に進んだ研究の最前線について発表。石灰拓本である山形大学本は、1928 年に制作されたことが事実となった田山花袋本（館林市、同文学館所蔵）にととても似ており、ほぼ同じ時期に制作されたことが新たに指摘された。

山形美術館・山形大学附属博物館 コラボ企画展「毒地社のいた時代」

主 催：山形大学附属博物館
会 期：2016 年 6 月 7 日（火）～ 9 月 9 日（金）
[62 日間]
会 場：山形大学附属博物館
来場者数：5,333 人



展示風景

山形美術館で開催された「収蔵品展 山形の近代洋画―県美展の先達たち」に合わせ、当館所蔵の毒地社関係作品および同時代、中央画壇で活躍していた満谷国四郎の作品《白石島》を展示した。毒地社とは大正時代、山形で結成された洋画グループである。その創設には山形師範学校で教鞭をとった小塚義一郎や県立山形工業学校図画講師の為本自治雄をはじめ、20 代前半の若者たちが関わり、当時の県内美術運動の一端を担っていた。しかしその名は地元でもあまり知られていない。本企画展で



は毒地社および同時代の作品を展示することで、来場者に大正時代の山形で起こった美術運動の一角を紹介した。

山形大学附属博物館・最上義光歴史館 連携展「山形の記憶」

主 催：山形大学附属博物館
最上義光歴史館
会 期：2016年7月9日（土）～9月11日（日）
[57日間]
会 場：最上義光歴史館
来場者数：5,452人
関連行事：実習生によるギャラリートーク
日 時：2016年8月7日（日）13:30～
参 加 者：39人



列品風景



本展は博物館実習履修生（以下「実習生」と表記）が山形大学附属博物館の収蔵資料を最上義光歴史館において展示する連携展であり、本年度で3回目の実施となる。今年度は山形大学附属博物館の代表的な収蔵資料10選をテーマに、展示資料の選択、展示タイトルの決定、解説文執筆、展示方法の検討などを実習生が行った。400万年前の化石から縄文時代の土偶、明治時代に制作された高橋由一の石版画などバラエティに富んだ内容となった。

展示制作後の実習生のレポートから、この実習を通じて実習生たちは展示制作の一連の流れを体験し、展示には様々な立場の人々が関わっていることや、展示制作にあたっては見学者に対する想像力が必要なことなどを学習できたと思われる。

学生企画展「It's an Element World!!」

主 催：SCITAのゆかいななかまたち
山形大学SCITAセンター
山形大学高感度加速器質量分析センター
山形大学附属博物館
後 援：国立研究開発法人理化学研究所
会 期：2016年10月14日（金）～11月15日（火）
[28日間]
会 場：山形大学附属博物館
来場者数：2,841人



関連イベント「元素かるた」

関連行事：①講演会「ニホニウム・113番元素の発見」

日 時：2016年10月29日（土）15:00～16:00

会 場：山形大学基盤教育1号館112号室

講 師：森本幸司先生（理化学研究所仁科加速器研究センター超重元素研究グループ超重元素分析装置開発チーム チームリーダー・山形大学客員教授）

参加者：100人

②関連イベント「毎週土曜日にゆかいな仲間たちによる実験教室と展示解説」

会 場：SCITAセンター、附属博物館

日 時：2016年10月15日（土）、22日（土）、29日（土）11月12日（土）

実験教室：13:00～13:30 展示解説：13:30～15:00



山形大学SCITAセンターは、理科学習の普及活動を促進するための本学独自のプロジェクトである「やまがた未来科学プロジェクト」に基づいて、科学的思考能力を備えた将来の山形あるいは日本を支える人材を育成する目的で設置された、体験型の科学実験教室プログラムなどを提供できる施設する。職員以外に学生スタッフがおり、科学実験教室の企画運営などを担当している。本展は、理化学研究所が合成した新元素合成実験に山形大学理学部門叶教授が関わったことをきっかけに元素に興味を抱いたSCITAセンター学生スタッフ有志が制作した。あらゆる人々に元素に興味を持ってもらうことを目的とし、「身の回りの元素」「有害な元素」などと日ごろ化学に触れる機会のない人々が興味を持ちそうなテーマを取り

上げ、「ウランちゃん」などの元素の名前がつけられたキャラクターが質問に答えるという設定のパネル展示である。1925年に制作された周期表（山形大学小白川図書館所蔵）と現在の周期表（元素が含まれている物質を貼り付けた）を同時に見比べることのできるようにするなどパネル以外の展示物も用意した。これらに加えて新元素合成のプロジェクトに関わった理学部の門叶教授を通じて理化学研究所の協力を得て、合成に用いられた装置の写真、装置のなかでも重要な部品である「ターゲットホイール」（合成にもちいられたものではない）、理化学研究所が制作した解説映像などを設置し、展示に厚みを持たせた。会期中の毎週土曜日にはSCITAセンターで実験教室を実施し、展示室で解説をしたうえで見学者とともに「元素かるた」を行うなど交流活動も積極的に実施した。

山形大学地域教育文化学部造形芸術コース
デザイン系作品展「カレイドスコープ展」

主 催：山形大学地域教育文化学部造形芸術コース
山形大学附属博物館

会 期：2016年11月1日（火）～11月15日（火）
[11日間]

会 場：山形大学附属博物館
常設展示室美術コーナー

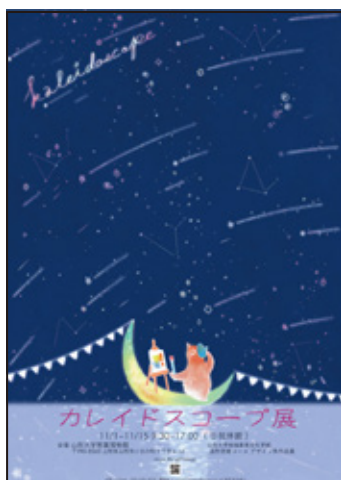
来場者数：1,498人

そ の 他：山形放送「ピヨ卵ワイド」（情報番組）
における生中継（11月8日放送）



展示風景

昨年度までは学外の展示施設を借りて実施してきた山形大学地域教育文化学部造形芸術コースのデザイン制作系の学生の作品展である。本年度は附属博物館の美術コーナーでの開催となった。昨年度リニューアルした附属博物館の展示室であれば十分な展示用の設備があり、学生および教職員が足を運びやすいと判断されたためである。



イラスト、絵本、ポップアップ、紙製の服、針金造形など多様な作品群を制作者が見せたい方法で展示することができ、附属博物館の展示室の活用方法を広げることができた。

また、授業における見学も複数行われ、大学博物館の使命である学生教育に寄与できたと思われる。

特別展「川橋勇人 不可視の博物誌」

主 催：山形大学大学院地域教育文化研究科
文化創造専攻造形芸術分野
山形大学附属博物館
協 力：2016 年度博物館実習生（後期）
会 期：2016 年 11 月 19 日（土）～ 12 月 15 日（木）
[22 日間]
会 場：山形大学附属博物館特別展室
美術コーナー

来場者数：1,100 人

関連行事：①ワークショップ

「不可視生物レプリカによる拓本採集体験」

日 時：2016 年 11 月 26 日（土）13:30 ～ 15:00

会 場：山形大学附属博物館特別展室

講 師：川橋勇人（山形大学大学院地域教育文化研究科）

参加者：16 人

②地域教育文化研究科文化創造専攻 3 分野合同企画

ミュージアム・コンサート「未知との遭遇」

日 時：2016 年 12 月 15 日（木）12:15 ～ 13:00

会 場：山形大学附属博物館特別展室

美術コーナー

参加者：45 人

印 刷 物：ポスター（B2 片面モノクロ） 150 枚

フライヤー（A4 片面モノクロ） 1,500 枚

そ の 他：YBC 山形放送「ゲツキンラジオぱんぱかぱ〜ん」（ラジオ取材）（11 月 21 日放送）



関連行事「ミュージアム・コンサート」



山形大学大学院地域教育文化研究科の川橋勇人氏は「不可視生物を拓本によって記録する」ことをコンセプトに作品制作を行っている。つまり彼の作品は生物標本の体をなした美術作品である。これらの作品を本物の生物標本が並んでいる附属博物館において展示することにより、「驚異の部屋」のような現実と空想が入り混じった空間が出現し、一層作品の魅力が引き立つことを期待して本企画はスタートした。

加えて、展示制作に実習生が館務実習として参加することにより、既存の博物館展示の枠にとらわれない見せ方となるよう工夫した。

結果として川橋氏にとっては思いもつかなかった方向に作品の世

界が広がり、作品の多様な見せ方があることに気づくことになった。実習生は自らが考えたことを展示というかたちに結実させ、その結果を来館者として客観的に見ることにより、展示制作とはいかなるものなのかを学ぶことができたと思われる。

**山形大学地域教育文化学部造形芸術コース新4年・
地域教育文化研究科文化創造専攻新2年による課題
研究成果発表展「△展（サンカクテン）」**

主 催：山形大学地域教育文化学部造形芸術コース
山形大学附属博物館
会 期：2017年3月23日（木）～4月14日（金）
[16日間]
会 場：山形大学附属博物館特別展室
美術コーナー
来場者数：916人



講評会風景



本展覧会は、来年2月に行われる卒業修了制作展を意識したプレ卒展であると同時に、新入生を歓迎するための企画を兼ねている。展覧会タイトルの「△」は3つの点とそれを結ぶ3本の線によって構成されている。入学した当初は未熟な1つの点だった学生たちは、勉学や研究によって表現したいものと表現するための技術を学び、線を得た自身の姿は「△」であると述べている。その形から、それぞれが思い思いの点と線を伸ばし、どのような形に変化していけるのか、作品からその可能性を感じ取って欲しいという思いが込められている。

最終日には講評会が行われ、限られた時間の中で、作品の解説や今後の方向性について活発な意見交換がみられた。

資料紹介

― 結城哲雄《蒔絵清庭文庫》 ―

須藤 静香（附属博物館員）

《蒔絵清庭文庫》は1932（昭和7）年、第13回帝国美術院展覧会に山形出身の漆芸家・結城哲雄（1900～1970：明治33～昭和45）が出品した文箱である。帝展は文部省美術展覧会（文展）の後身として1919（大正8）年から毎年開催されており、当初は日本画・洋画・彫刻の3部で構成されていた。1927（昭和2）年から美術工芸部が設置されたが、日本画・洋画部の審査員が兼務していた。第12回帝展において漆芸家による審査が行われるようになり、応募数1,148点中7点が特選に選ばれ、その内の一つが結城の《動静文庫》（所在不明）であった。つまり、その翌年に制作された《蒔絵清庭文庫》は無鑑査での出品であった。

本資料は、方形で印籠蓋造、蓋表と側面の縁には朱線が施され、全体に黒漆が塗られている。蓋の中央には漆を高く盛りその上に蒔絵を施す技法「高蒔絵」により鶏頭花が描かれ、箱の側面には岩と草が表されている。草花の陰影には銀の蒔絵が用いられ穏やかな庭の風景が表現されている。しかし蓋をあけると景色は一変、鮮やかな黄漆の地に大輪の朝顔が咲き乱れている。風にたなびく葉や、蔓が巻きついた垣根は身の内から蓋裏まで続き、賑やかな景色が広がっている。鶏頭と朝顔はいずれも奈良時代に中国から渡来し、古くから鑑賞を目的として栽培され、詩や絵画などの画題としても好まれてきた。鶏頭と朝顔の描かれ方の対比は、特選を受賞した《動静文庫》にもみられる。蓋表には風にたなびくもろこしの葉と、穂の上に留まる1匹のカマキリが描かれ躍動感に満ちた画面となっている。一方、内面には糸瓜の葉・蔓・実がびっしりと敷詰められ静かな佇まいを覗かせる。この動と静の対比から本資料は前作を踏襲した作品であることがうかがい知れる。



作者である結城哲雄は山形県酒田市（旧飽海郡松嶺町）の佐藤家に生まれた。名を留吉という。その後、山形市小姓町結城家の養子となり1916（大正5）年16歳で山形の鈴木元吉（生没年不詳）から蒔絵を学んだ。1918（大正7）年上京し、万博や漆工競技会等で活躍していた蒔絵師の船橋舟珉（生没年不詳）に蒔絵を学び、図案を日本画家、広瀬東畝（1875-1930：明治8-昭和5）から学んだ。1921（大正10）年昭和初期の漆工界で活躍した植松包美（1872-1933：明治5-昭和8）に師事し、この時、金一色で文様を描く加飾の技法「描金法」を体得したといわれている。1925（大正14）年に独立し、各展覧会に出品するなど精力的な活動をみせるも、戦争により1945（昭和20）年に帰郷。その後、天童市の工芸家、中川哲哉（1897-1976：明治30-昭和51）とともに山形県総合工意匠課嘱託員として後進の育成をするなど、県工芸界の発展に尽力したため、その功績が認められ1957（昭和32）年には斎藤茂吉文化賞を受賞した。

〈参考文献〉

結城哲雄「現代漆工藝の各種傾向に対する見解」日本漆工会『漆と工芸』（1940）

同「工芸近想」美術工芸編輯部他『美術・工芸』18号（1943）

同『結城哲雄の漆』（1995）

村山鎮雄『山形の近代美術』（2009）

木村重道「大手門雑記 結城哲雄の人と作品」高橋正司編「やまがた散歩」（1981）

『日展史編纂委員会『日展史10 帝展編五』（1983）

監修 荒川浩和 解説 内田篤呉『近代日本の漆工芸』（1985）

光芸出版編『漆芸事典』（2004）

漆工史学会『漆工辞典』（2012）

平成 28 年度事業報告

平成 28 年度に本館で実施した博物館実習の単位修得者数は下記のとおりです。

学 部	人 数
人 文 学 部	20
理 学 部	17
地域教育文化学部	16
科 目 等 履 修 生	1
計	54

平成 27 年度見学者統計 (2015/4/1 ～ 2016/3/31)

来 場 者	個 人	3, 920
	団 体	536
	計	4, 456

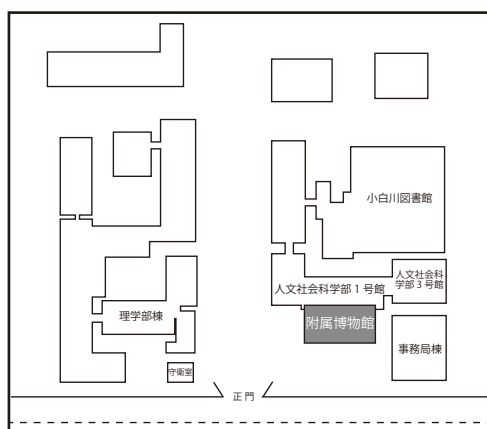
平成 28 年度見学者統計 (2016/4/1 ～ 2017/3/31)

来 場 者	個 人	12, 309
	団 体	3, 553
	計	15, 862

お知らせ

今号より館報は PDF のみの発行となりますことをお知らせいたします。

附属博物館では、所蔵品を授業等で利用していただけるよう、協力体制を整備しています。お気軽に職員までご相談下さい。



利用案内

開館時間 9 : 30 ～ 17 : 00

休 館 日 土曜・日曜・祝日（他臨時休館あり）

入 館 料 無料

アクセス

公共交通機関の利用：JR 山形駅より県庁行バスにて山形南高校前（山大入口）下車、そこから徒歩 10 分。

山形大学附属博物館報 No. 43 2017. 3 発行

〒990-8560 山形市小白川町一丁目 4-12

URL <http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/> Email hakukan@jm.kj.yamagata-u.ac.jp

編集兼発行人 山形大学附属博物館

TEL 023(628)4930 FAX 023(628)4668